医療法人徳洲会
湘南藤沢徳洲会病院
（神奈川県藤沢市）

高度な救急医療やがん治療を核に地域とともに進化する病院へ

神奈川県茅ヶ崎市の茅ヶ崎徳洲会総合病院は2012年10月、隣接する藤沢市に移転新築し、湘南藤沢徳洲会病院（419床）として新たな一歩を踏み出した。JR辻堂駅前再開発計画の主要施設という役割を担うと同時に、これまで培ってきた医療機能を拡充させ、高度な急性期総合病院としてさらに成長していく同院をレポートする。

取材・文＝髙橋祐子　撮影＝関口宏紀

↑明るくゆったりとしたロビー。アースカラーを配し、落ち着いた雰囲気をめざした

←スタッフが集まる場所を囲むように病室を配することで導線を最短に

正面玄関に面したエスカレーター

隣接する公園との連続性を感じさせる緑豊かなアプローチにより、威圧感を与えることなく周辺環境に溶け込んでいる

茅ヶ崎から藤沢に移転新築 駅前の主要施設として新規オープン

2012年10月、JR辻堂駅前の再開発地域に誕生した湘南藤沢徳洲会病院（419床）。神奈川県茅ヶ崎市で32年にわたり地域に貢献してきた茅ヶ崎徳洲会総合病院が、建物の老朽化と手狭さを理由に移転新築した。長く茅ヶ崎市内での移転を模索してきたが、用地確保が難航。藤沢市辻堂駅前の再開発計画に手を挙げ、当地での建設が決まった。なお、茅ヶ崎の病院跡地には新たに132床の急性期病院を建設する予定。14年秋のオープンを計画しており、工事期間中は跡地にクリニックを開設し、地域の医療需要に対応する。

明るいロビーが心地よい同院は、旧病院の2倍近い敷地を得て、地下1階地上10階建てと十分な広さを確保。内部の設計は、患者・職員双方の動線にこだわった。さらに、出入口を最低限に絞りセキュリティ面を強化。開放感と安全性を両立させた。交通至便な立地も幸いし、現在は新地での患者が3割ほど。茅ヶ崎方面にはシャトルバスを運行し、従来の患者にも配慮する。

救急、がん、小児・周産期の医療を強化 あらゆる年齢・疾患の患者をサポート

移転に伴い、診療機能の拡充も図った。グループ全体の命題でもある救急医療は、従来の4倍の面積の救急室を設け24時間対応する。茅ヶ崎時代には、市内の約半数となる年間6000台の救急搬送を受けていた同院は、移転後も藤沢市中心に茅ヶ崎市の一部も含めたエリアからの搬送を受け、台数は1万台に届く見込みだ。

がん治療分野では、化学療法室のベッド数を6床から28床に増やしたほか、「ダヴィンチ」や「ノバリス」といった最新の高度医療機器も導入。こうしたことから、各科が一丸となったがん治療が可能になっている。亀井徹正院長は、総合病院でありながら専門的ながん治療を追求する理由をこう語る。「高齢のがん患者さんは、がん以外にも心臓病や糖尿病、認知症などを抱えている場合が非常に多いです。複数疾患に対応しつつ高度ながん治療を提供することも、総合病院の役割だと考えました」。緩和ケアにも力を入れ、地域のがん患者をサポートする。

また、小児・周産期医療の強化も柱の1つだ。同院独自の「胎児科」を新設して専任医師3人を揃え、NICUや専用手術室を設置した。今後、出生前の診察・手術の実績を積み、大学病院並みの医療技術を培っていくという。そのほか、再生医療分野の研究・治療を見据えたセンターの稼働も計画する。患者の年齢、性別、疾患に応じた総合的な医療を提供しつつ、常に医療の質を高めていく姿勢がうかがえる。

同院では、茅ヶ崎時代から積極的に若い人材の育成に力を注いできた。同院の充実した医療提供体制には、そうした人材の活躍が大きく貢献している。「今後も患者、地域の開業医・介護拠点などと協働しながら、地域ニーズに応じて進化していける病院をめざしたい」（亀井院長）

↑全28床の外来化学療法室

←専門的なリハビリテーションを実施

「市をまたいだ移転には苦労もありましたが、医師会との調整、地域住民への説明などを熱心に行って理解を求めました」と話す亀井徹正院長

↑シャトルバスは全部で10台。利用が多い時間帯には10分間隔で運行する

→↓内視鏡下手術用の手術支援ロボット「ダヴィンチ」（上）と非侵襲的放射線治療が可能な「ノバリス」

↑胎児科専用の手術室

→東病棟・西病棟のスタッフステーションをバックヤードでつなぎ、物品の貸し借りやフォローがしやすい配置に

病院DATA
医療法人徳洲会
湘南藤沢徳洲会病院
神奈川県藤沢市辻堂神台1-5-1
TEL：0466-35-1177
URL：http://fujisawatokushukai.jp/
病床数：419床